

徳山空襲の話をしていただきますが、これは若い人達には是非聞いてもらいたいと、常々思っています。子供達は、徳山が空襲にあったことを知りません。家庭でも学校でも語られないのですから仕方がないでしょう。平和はひとりでのんやり込んだのではありません。ぜひこの事実を知ってもらいたいと思います。

さて、徳山は2回空襲に見舞われました。

5月10日と7月26日です。

子供心に海軍の燃料を蓄える施設が秘密裏にできた様に感じていました。ですから、燃料廠については、知ってはいけない、話題にしていけない印象がありました。具体的に正確にどこにあったのか、今も知りません。

昭和20年（1945年）、5月10日に、海軍燃料廠がやられました。

真っ昼間けたたましい音響でサイレンがなりました。燃料廠とその周辺に爆弾が投下されましたが、街にはあまり影響がなかったので、なんとなく忘れられていましたが、海軍にとっては大きな被害でした。死者：500人余談ですが、戦艦大和も徳山湾で給油して沖縄に出撃しました。

その空襲の後も、B29が頻繁に飛んできて、寝静まった頃に大音響のサイレンが鳴るようになりました。でも何も無く、東の方に飛んで行く、また寝る、ということが度々ありました。

ご婦人たちはいつ飛び起きても良い様に、モンペを履いて寝ていました。

昼間は防空ずきんをかぶって、3メートルほどの竹槍で、敵の兵隊をやっつける練習をしていました。今考えると滑稽ですが、その当時は真剣でした。

7月26日のことです。夜中に大音響の空襲警報のサイレンが鳴り響いた。いつもの通り、敵機は徳山を素通りして東の方に飛び去るのだろうと、寝ていました。

しかし、いつもとは違い、けたたましくサイレンが何度も鳴り響いた。

その内に空一面が火で真っ赤に染まった。

『空襲だ〜』と家族みんな、あわてて飛び起き、防空頭巾をかぶり、蚊帳からとび出て、裏庭に作ってあった防空壕に逃げ込んだ。2畳ほどの広さ。

当時の我が家は今の家から10メートルぐらい離れた所にあった。

路地に入って3軒目で一番奥にあった。

私の家の台所がわと玄関先には竹やぶがあった。

その竹やぶや庭先に銀紙がパラパラパラと大量に降ってきた。(銀紙は電波障害を起こすため。) 焼夷弾が竹やぶに大量に落ちて来て、竹やぶが燃え始めた。我が家に火が移らないように、父は防空壕から出て水をかけ、また水をかけを何度も繰り返した。我々子供は懸命に井戸からポンプで水をくみ上げた。今の様な水道はなかった。

火の勢いがひどくなって、回りの家に火がついたら逃げ道を失うので、逃げようときめた。

父が5才の私の手を引き、母が7才の姉の手を引いて走った。その当時の徳山は細い路地がクネクネしていた。私は走っているさい中に下駄が脱げた。逃げるのが一生懸命で、はき直すことはできず裸足で徳山高校の方向に走った。

回りは火の海。上空では何10機ものB29が、焼夷弾を雨霰のように落して行った。B29は一機から何10発も爆弾を落とすのです。焼夷弾は長さ、60センチ位、直径13センチ位、六角形だった。

地面に落ちると脂みたいなのが飛び散るんですね。日本の家は木造なので、それを焼き払うのが目的だったでしょう。

私達が逃げる途中、死体がゴロゴロしていた。それをまたいだり横目で見ながら走った。死んだ母親に覆い被さって泣いていた幼児を今でも思い出す。東から、西から大勢の人が頭にフトンをかぶって走った。道路は逃げる人と死体、火の海で地獄の状況だった。

当時、徳山高校の北側には小川が流れていた。小川の北側(山の方向)は一面畑と田んぼだった。夏にはホタルが飛び、家の中や道路にもホタルが飛び交う趣のある場所だった。

今の国道2号線付近はみんな田んぼだった。山から小川も流れていた。農家の馬や牛を洗っていた。レンゲが畑一面咲いて、よく遊んだものです。

私達は徳高の北の小川を渡って山の方に走り、田んぼのあぜ道を左に右に曲がり、走った。空は猛火で真っ赤だった。真夜中なのに昼間のようにだった。飛行機が容赦なく飛び交った。

山の近くの田んぼに水を引く溝があって、溝の後ろは土手だったので、私達は体がかがめ草をかき分けそのミゾに入った。草に被われていたので隠れるのには絶好の場所だった。すでに大勢の人が肩を寄せあって座っていた。しばらくして私達のうしろの土手が"ドッスン"と大きくゆれた。頭を被っている草の間から、泥がザーッと降って来た。しかし、幸いなことに大事故にはならなかった、よかったと、その時は思った。

夜中なのに辺りは昼間のように明るく、飛行機、焼夷弾、空から落ちる銀紙、負傷者、転がる死体、まことに地獄の光景だった。真っ赤に燃え盛る中を右往左往した生き地獄の光景は今もはっきり思い出す。

しばらく時間が過ぎ、やっと敵機が去り、ようやく『空襲警報解除』になった。みんな身がかがめて隠れていたミゾから這い出て、お互いに生き延びたことを喜びあった。しかし、私の隣で身を屈めていた女性が出てこない。我々の後ろに落ちた爆弾の破片が、土手をつらぬき、その女性の後頭部から額にかけて頭をつらぬき死んでいた。まわりの喧噪で全く気が付かなかった。

気の毒な残酷な出来事だった。大人達はどこから探して来たのか雨戸に婦人を乗せて、運んで行った。

勿論、我が家は焼け落ちただろう、と私達は考えていた。父が『家がどうなっているか見て来る』と言って、燃え盛る中を出かけて行った。

長い時間が経過したが、父は戻って来て、家が無事であると言った。父が家に着いた時、ニワトリ小屋は焼けおち、家の外壁が燃えており、水をかけて消したと言った。回りの家は全部焼け落ちてしまったから、遠方から我が家が見えたと言った。

家族皆で帰路についたが、焼かれて全滅した家々、死人や爆弾がゴロゴロ転がっていた。布団を頭から被ったままの死体もあった。爆弾のそばを通る時には、爆発ないようにソーツと歩いた。

父は家に帰ると家のまわりに水をかけ、無事を確認して、会社（現在の株式会社トクヤマ。その当時は、徳山曾達株式会社）の様子を見に出かけた。会社に行く道路や小川には死体がゴロゴロしていたと話していた。空襲の後2日間、市役所の前の道に死体を並べて、家族が引き取って行った。

さて、家を焼かれ住む家が無くなった人達が大勢いた。我が家は2階建てだったので、近所の被災家族2世帯と我々3家族が共同生活を始めた。その内の家族のご主人が戦地から戻ってきて、庭先で「ただいま帰りました」と言って直立不動で軍隊式の敬礼をした。3家族がずいぶん長い間一緒に過ごした。懐かしい思い出です。

焼け野原の中で、使える木材を集めて自分達で小さな小屋を建てて住んでいた人が何家族も居た。小学生、中学生達が良く働いた。高校生は大人以上に働いた。

今思うとあの凄まじい空襲の中でよく生き残ったものです。食料がないので、北山を開墾してさつまいもを作って、主食にした。小学生の私は、学校から帰るとすぐリヤカーをひっぱって山の畑に行った。母はいつも畑を耕していた。疲れて大木の陰で寝ていることもあった。小学生の私がリヤカーにイモ等を乗せて、山道を下り、30分位重いリヤカーを引いて帰った。今では考えられない光景です。

戦後は食べるものがなかったので、学校の帰り道、畑に植っているサツマイモを引き抜いて、手で泥を落として、かじったものです。だから、お腹には回虫がたくさんいた。寝ているとお尻の方がカユイのでかくと、回虫がお尻から出ていた。5～7センチ位で真っ白だった。

戦争は絶対にしてはいけません。これ以上みじめなこと、悲惨なことはない。誰一人戦争でハッピーになる人はいないので。今の政治家も戦争を知らない人が大半です。戦争の怖さ、バカらしさを知ってほしいと思います。

徳山空襲飛来 B29 : 100機以上、市街地の90%以上が焼失。

以上

参考

当時の惨状を時重昌一の「茶毘の煙」(『郷土随筆』第三集、徳山公論社)は次のように記している。

吾々役人は死体の身元を調べて、死体の一つ一つに住所・姓名・性別・年齢を記した札を付ける仕事だった。着衣の焼けていない死体は、胸や雑嚢に付けてある名札で判るが、衣類が焼けて丸裸の者、全く黒焼となっている者等は、年齢や性別さえも判らないのである。(中略)それから三日目の正午迄には全犠牲者の身元が判り、死体の収容を終った。夏ではあるし、五百余名の死体を一ヶ所に収容したので、その惨状は眼を覆うものがあつた。(中略)市内のお寺の焼跡三ヶ所に臨時火葬場が設けられた。

私は徳応寺係となった。

火葬準備として当時焼残った木材や、古材を本堂の焼跡にぎっしり詰め、その上に死体を一列にならべた。私はならんだ順に氏名を火葬帖に記入した。親子五人仲良く枕をならべた者や、火災と同時に産気づいたらしく、裸体の母親の側に産れたばかりの嬰兒の死体が置かれており、全く地獄絵そのままだった。

空襲によって焼け出された市民は、雨露をしのぐ程度のバラック小屋を建て、あるいは防空壕を利用して仮住いとするなど悲惨な状態であった。

余録

私は歴史を正しく理解する為に、8月15日は終戦記念日でなく、正直に敗戦記念日と言うべきだと思います。

私の母の弟は、学徒動員で徴兵され硫黄島で戦死しました。硫黄島上陸から約2ヵ月後に戦死です。

祖母は、シベリアで捕虜になっていた兵隊の引き揚げ船が舞鶴に着くと、新聞に乗っている帰還兵の名前を一人一人見ていた。息子は硫黄島で戦死したのだからシベリアからの船に乗って帰る訳はないのですが、祖母はひょっとすると乗っているかもしれないと言って、いつも名前を探していた。

こんな光景を覚えているのは私の年代が最後かも知れません。

私もこの年齢になったからでしょうか、母親の愛情のすごさをつくづく感じるのです。